

～旧約聖書を読んで感じること～ (61) ダビデの権力と権威



ダビデ王 Nicolás Cordier

ヘブロンで王となっていた37歳のダビデは 40 年続いたサウル王朝の最期の王イシュ・ボシェト亡き後、ヘブロンにやって来たイスラエル全部族の長老たちと契約を結び、全イスラエルの王として油が注がれました。

エルサレムに都を置いたダビデが真っ先にしたことはペリシテとの戦いでした。ダビデは主に託宣を求めました。「お前に先んじて出陣される」主を信じて、ダビデは主の命じられたとおりに行動し、中央部から地中海沿岸に至るまで、ペリシテ人を討ち滅ぼしました。その他にも、周辺諸国を軍事力で圧倒しました。そのため隷属した諸国から銀、金、青銅の品々、名産品などの貢物を受け、財政力も強大になって行きました。

次にダビデは「神の箱」をエルサレムに運び上げました。その時、イスラエルの精鋭3万をことごとく集めたとあります。戦争以上に「神の箱」がダビデにとっては慎重を期すべきものでした。それを運ぶ行進では糸杉の楽器、豎琴、琴、太鼓、鈴、シンバルを奏で、角笛を吹き鳴らして進み、ダビデは力の限り踊ったと記されています。民の信仰の拠り所を確保しました。

ダビデの治世は、軍事が中心で、多くの勇士の名前の記録があります。行政面でも、書記官、監督官、補佐官などを置き、王宮にも祭司、預言者など、多くの重臣を置くことによって、強力な王国を築いて行きました。軍事、財政、行政、宗教という国家としての土台を築きあげました。



ダビデを諫める預言者ナタン Aert de Gelder

王としての権力を支えていたのは、ダビデの能力だけでなく、民衆からの支持でした。それはダビデの信仰に生きる姿勢があったからです。宮廷に預言者、祭司を置きました。預言者ナタンは、姦淫の罪を犯し、その罪を隠そうと、女の夫を殺すように仕向けたダビデを糾弾し、諫めます。ダビデはその言葉を神の言葉として受容するのです。その信仰者としての姿勢が、ダビデに王としての揺るがない権威を与えていたのです。

ひとりの人間としてのダビデは豎琴を奏でることによってサウル王を慰めたほど、音楽を愛し、音楽に合わせて賛美の歌を歌う、詩人の側面を持っていました。詩編には「ダビデの歌」と名付けられているものが 73 編残されています。ダビデの歌は、神への信頼、感謝の思いを訴え、力に溢れ、それを読む者に慰めを与えます。

ダビデにはヘブロン時代に6人の妻、エルサレムに移ってからは、更に数名の妻、側女を持っていました。ダビデには戦利品として、また、献上品、人質として多くの女性が妻として与えられたのでしょう。名前が記されている息子だけで、合計17人もいます。息子たちは祭司という身分を与えられていますが、息子というものは王位継承をめぐる争いの種でもあります。ダビデの性的欲望の強さ、家族関係の複雑さが、ダビデの家を壊していく要因になっていきました。

ダビデは多くの民から愛され、多くの家臣や部下に心から慕われました。外国にさえも、ダビデを愛し、協力を惜しまない有力者が何人もいたのです。それは神への信仰はもとより、ダビデがサウルを重んじ、ヨナタンとの友情を忘れず、その忘れ形見の孤児を厚遇したことからわかるように、明朗で、素直に人を愛し、信義を重んじる人物だったからでしょう。ダビデは自ら感謝して歌っています。

神に従って人を治める者／神を畏れて治める者は／太陽の輝き出る朝の光／雲もない朝の光／雨の後、地から若草を萌え出させる陽の光。(サム下 23:3b-4)